



『ショパン〜プリンス・オブ・ザ・ロマンティクス』
 アダム・ザモイスキ (著) 大西直樹; 楠原祥子 (訳) 音楽之友社 2022.10

ショパンの人生や作品について日本語で書かれた本は、訳書も含めて百冊近くになると推察されますが、また新たな1冊が誕生しました。ポーランドの大貴族の家系を出自とするアダム・ザモイスキが2010年に刊行した英語版 *Chopin: Prince of the Romantics* の和訳です。ザモイスキは1979年にもショパンの伝記 *Chopin: a Biography* を著わしており、この新著は新たな資料をまじえた改訂版という位置づけになっています。

旧著と同様、一次資料に基づいて事実を年代順に追い、ショパンの人生を誕生から最期まで再現するような記述は克明で、極めて密度が高い内容です。簡単に読み流せる文章ではないものの、著者の力強い筆致に読者は引き込まれることでしょう。

つとめて客観性を保とうとする叙述のため、何らかの意味で評価に関わる事柄は慎重に述べられています。ショパン自身も交流のあったザモイスキ家の末裔であればこそ、誇張して語られがちな楽聖像からは距離を取り、真実を再現しようとしているのだと思われまます。

エルスネルとクルピンスキ

目を引く内容としては、まず、ショパンにとって音楽上の師に当たるユゼフ・エルスネルとカロール・クルピンスキとの対立が挙げられます。ドイツ音楽を模範とする前者とイタリア音楽を崇敬する後者との間には考え方の違いがあり、その争いに若きショパンが巻き込まれていたことを筆者は初めて知りました。

それに劣らず衝撃を受けたのは、ショパンの親友として知られるユリアン・フォンタナが1842年5月、ポーランドにいる妹に宛ててパリから送った手紙の内容です。「僕は人生を開いてくれるはずの一人の友に頼ってきた。でも、その人はいつも不誠実で偽りだらけだった。彼の影響から離れたくてパリを去ることまでしてみたが、良いことは少しもなかった」という文面に実名はありませんが、内容からショパンを指していることは明らかです。筆者が知る限り、この手紙がこれまで日本語の活字になったことはありません。

もう一人、ショパンが頼っていた年上の友人アルベール・グジマワがロシアのデカブリスト(十二月党

員)とつながりを持ったため、ロシアで投獄された経験を持つことも、あまり知られていない事実ではないでしょうか。

シューマン、クララ、メンデルスゾーン

もちろん、明るい出来事も多数あります。1835年10月、一時婚約していたマリア・ヴォジンスカのいるドレスデンを訪れたショパンは、パリへの帰路、ライプツィヒに立ち寄り、ロベルト・シューマン、クララ・ヴィーク、フェリックス・メンデルスゾーンと対面しました。結婚を控えていたロベルトとクララに会わせようと、メンデルスゾーンがショパンの到着を待ち望んでいたという叙述からは、いかにもロマン派の音楽家たちらしい青春群像が浮かび上がってきます。

また、1836年10月パリのオテル・ド・フランスでショパン、ジョルジュ・サンド、フランツ・リストが一緒にひと時を過ごす場面も印象的です。女流作家サンドとショパンが出会った日にほかなりません。約9年間の生活をともにしたショパンとサンドの関係については、既に多くの評伝で語られているものの、ザモイスキの客観的な説明を読むと、ずいぶん印象が変わるように思います。

今世紀に刊行された訳書を顧みれば、2012年に春秋社から、音楽学者ジム・サムソンの研究書の和訳「ショパン 孤高の創造者〜人・作品・イメージ」(大久保賢訳、英語版: *Chopin*. Oxford UP, 1996)が出ています。この本は、どちらかといえばショパンの作品史を中心にした叙述になっていますので、ザモイスキの著作と併読することで最新のショパン像が立体的になることでしょう。(三浦洋)

(みうら・ひろし) 1960年北海道三笠市生まれ
 北海道大学大学院文学研究科博士後期課程修了
 (博士(文学))、2009年より北海道情報大学教授
 日本ショパン協会北海道支部理事、本会会員



6月3日(土)の記念演奏会での三浦氏の「お話」は、「近年のショパン・ブーム」と題して、レヴェルの高かった2015年と2021年の国際ショパンコンクールにちなんだお話になります。